主な記事
2面　ひと、小教区紹介
　　典礼奉仕のために
3面　若い力、震災支援
4面　医療のともしび、新刊書籍
　　平和行事
　　教区スケジュール

カトリック高松教区報

2011年9月18日（第144号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

11月23日高松に集まろう

さあ！教区宣教大会へ

生き生きとした教会めざす

二〇〇八年度から三年をかけて準備を進めてきた高松教区宣教大会（教区シノドス）がいよいよ十一月に迫った。一昨年は教区現状認識、昨年はそれを受けての養成、そしていよいよ、そこから積み上げてきた私たち小教区、地区における将来の信仰の在り方を表明する時が来た。

高松教区宣教大会は11月23日（水・勤労感謝の日）桜町司教座聖堂、四国カトリック会館及び桜町聖母幼稚園を会場に、9時45分受付、10時15分開会と決まった。

この宣教大会開催への道のりを振り返ってみよう

二〇〇四年の溝部司教着座は「教区の再生と一致」という大きな課題へ向けての出発点であった。以来、教区の歴史と現状を踏まえて対話を積み重ね、また教区運営の両輪ともいえる司祭評議会と宣教司牧評議会を立ち上げた。

「道」の問題についてはそれまでの経過を踏まえ、二〇〇八年夏に神学院閉鎖を決定し、翌年三月に神学院を廃校とし、用途変更を行って教区霊性センターとした。教会法及び国内法にも不備がないように努めた。これからどのような教区、小教区を作ろうとするのかを問う時、神学院廃校に代わる青少年宣教司牧の活性化と召命問題への取り組みを見据える事としたのである。

二〇〇八年からは三年を掛けての教区宣教大会の準備初段階として、現状認識をテーマに教区民の集いの開催を計画した。しかし、新型インフルエンザの影響で中止となり、二〇〇九年一月三十日にそれに代わる教区・小教区代表者会議を行い、どんな教会を作りたいか等を（ピン・ポン）ボールのキャッチボールをしながら考えて来た。それをもう一段膨らませるためにピンポールが第二弾として投げられ、養成の年を歩み始めた。自分たちで何が出来るかを考え分かち合いながら、二〇一〇年各地区における「教区民の集い」でその考えを表明し確認してきた。

今秋十一月に宣教大会が開かれるが、これまでの養成が花咲くように、準備が進められている。実施日時場所については色々と変遷を重ねて上記のように決定した。

これまでの歩みを大切に

高松教区では溝部脩司教着座以来七年の間、再生と一致に取り組んで来た。司祭・修道者・信徒が共に創るのが教会と言えるが、高松教区では尻すぼみになってしまった感もある。本教区は召命も途絶え他に頼ってしまった。　また教会組織を教会法に則って運営して行くという意識が薄かった。四年をかけて現在、司教の諮問機関としての司祭評議会、宣教司牧評議会と言う教区を作り上げるための両輪が育ってきた。

今年は高松教区にとって画期的で大事な年になる。それは前向きに取り組んでいく宣教大会を以って刷新していく方向性を定めているからだ。これまでに多くの出来事があったが、それによって各個人の見方が変わってきているようでもある。

高松教区は小さく貧しい教区である。しかし貧しいからこそ出来ることもたくさんある。教区大会は現実を踏まえ協力して共に喜んで考え、作っていくための通過点となろう。今、司祭だけでなく信徒と共に協力し話し合い、あるべき教区に向かって歩んでいる。組織を福音化し、どう動かすかが大事だ。

司教叙階式が間に入った関係で、表題の準備に若干の遅れが出ていることは否めないが、各地区は残りの期間内で積極的に準備を整えていく必要がある。

「宣教大会」開催に向けて

特に九月には直近の準備に入り、宣教大会へ向けて各地区は意識の高揚と具体的準備に向けて取り組んでいくことになる。準備への取り組みとはいうまでもなく、冊子「ともに喜びをもって生きよう」（日本カトリック司教団）の光に照らして、昨年地区大会で表明した「こんな教会になりたい」を見直していく作業のことである。そして、その過程を大事にしていくことである。

先回の地区大会で表明された「こんな教会になりたい」という小教区の表明を受けて、これからの地区としての在り方を、ただ単に、自分たちのなりたい教会というのではなく、「ともに喜びをもって生きよう」というＮＩＣＥの精神に生かされた教会として、地域から求められ、また本当に生き生きとした教会を目指そうとして現在分かち合いが持たれている。基本的に教区が主導するのではなく、地区の主体的在り方を各地区で探りながら進め、これが大きなうねりとなることを願っている

宣教大会の準備には地元香川地区に多大な協力をお願いすることになるが他三地区にも綿密な協力と連携を取りつつ成功を祈りましょう。

「新しい福音宣教」のかたち探そう

諏訪榮治郎司教

司教叙階式から二ヶ月余りがたちました。最近各教区からまたバチカンからと色々な手紙が入ります。教会の広がりが一気に見えてきました。教会は世界につながっている「普遍教会」を実感しているこの頃です。

そんな中で今、世界の教会に一つの動きが起こっています。来年、第十三回世界代表司教会議（シノドス）が計画されており、「新しい福音宣教」と言うテーマが討議されるのです。私たちが生きる世界は急速で驚異的な技術の発展、経済システムの変化や利権などに流されています。それは生きることの価値観に変化をもたらし、時にありとあらゆる苦しみと問題、紛争を産み出しています。生きる意味と希望はどこにあるのでしょうか。どのようにしたらイエスさまの福音が現代人の心に触れる事が出来るのでしょうか。

世界中の教会が「新しい福音宣教」の姿を模索し始めています。イエス様の心が日本（四国）という社会、精神文化の中に生きる人々にどのように触れ、拠り所となるのでしょうか。以前から問われてきた大きな問題です。

そんな中で「教区宣教大会」が行われようとしています。「どんな教会になりたいのですか」の問いかけは、ある意味で世界の教会と同時並行の動きとなりました。教会（使徒）は見えない神の心をこの世で表す役目である福音宣教をイエス様から頂いています。これが教会の根本使命です。

また二十五年前の福音宣教推進全国会議（ナイス）の結論も基本課題となります。すなわち「教会」とは信仰、共同体、現実の三本柱を調和させた時「私の教会」を脱皮して「キリストの教会」になれると言うものでした。三本柱のバランスが欠けると変てこな教会になります。さらに司祭、修道者、信徒が交わり、協力して教会（キリストの体）をつくるための「協力宣教」という取り組みも教区の基本姿勢です。

私たちはこれを三年かけて取り組んでまいりました。十一月に行われる「教区宣教大会」はある意味で世界の教会と心を合わせた大会になるでしょう。それはどんな教会になりたいかと言う「結論を発表する大会」と言うよりは、「新しい福音宣教」への各地区の「道のり」を祈り合う集いだと思います。それは各小教区の目標より、「地区」の目標であると思います。なぜなら「地区の絆」を大切に作り上げることによって、小教区間の協力関係が生まれるからです。これが「協力宣教」です。

世界の教会が「新しい福音宣教」を模索し始めた今、私たち高松教区も「普遍教会」と一緒に歩み探し続けましょう。社会に希望のメッセージである福音を色々な形で表していきましょう。その基本となるのは信じる者一人ひとりの「イエス様との出会い」の体験です。大きな課題ですがこつこつと積み上げて参りましょう。

新司祭評議員・新地区長についてのお知らせ

諏訪新司教着座により、諏訪司教は司祭評議会々長として以下の通り新しい司祭評議員と地区長を任命しましたのでお知らせいたします。　（太字氏名評議員は地区長）

□　諏訪榮治郎司教（教区長）

□　教区職務上評議員
デシデリオ・カンバラ（司教総代理：香川地区長）
村上康助（会計担当）、西川康廣（事務局長）

□　司祭団選出評議員
ファン・マヌエル・ゴンサロ（愛媛地区長）
松永洋司、パウロ・セコ、土屋和彦

□　司教指名評議員
イルダラヤージ・アントニサミー（高知地区長）
乾盛夫（徳島地区長）
サンティアゴ・サイズ、レナト・フィリッピニ

はばたき

「アヴェ・マリアの祈り」が正式に確定したのは嬉しいことです。これは私達にとってとても大切な祈りです。若い頃、どのように生きるべきかを求めて教会を訪れた私は、この祈りを教えられた時、「今も死を迎える時も・・」とは何とも不思議なお祈りだなあと違和感を覚えました。

しかし、この祈りをするたびに人生を死の側から観るという訓練をさせていただいたのでしょう。祈るにつれ、年を経るにつれて、それが当然と思い、聖母にぜひお祈りして欲しいと思うようになりましたし、よき死を迎えるためにはよく生きなければと思えるようになりました。

両親や夫を看取る時も、この祈りをどれほど唱えたことでしょう。死にゆく人にとってこの祈りがどれほど必要なものかを私は実感させていただきました。災害や事故で突如死を迎えた方々やご遺族のためには、真摯な祈りをお捧げしなければと思います。彼らにとって死は多分思いがけないことだったのでしょうから。

しかし、死を迎える前に、人生の最後の仕上げとなる老いや病い、孤独や絶望という誰もが避けては通れない感情も充分に味わい、自分の心にみがきをかける勇気を持ちたいと思います。それは多分、この世での神さまからの最後の贈物になるのでしょうから。

神の母聖マリア、私たち罪人のために、今も死を迎える時も、お祈りください。
アーメン。

広島教区に前田司教決まる

教皇ベネディクト十六世は、ローマ時間6月13日正午（日本時間同日午後7時）、カトリック広島教区の三末篤實司教（75歳）の定年による退任願いを受理し、新しい司教に長崎教区司祭のトマス・アクィナス前田万葉（まえだ・まんよう）師を任命することを発表しました。

広島教区（広島、山口、島根、岡山、鳥取県）の信者数は聖職者と修道者を含めて20,784人、小教区41、巡回教会6、集会所2、大学2、高等学校7、中学校6、幼稚園37、社会福祉施設16（2010年12月末現在）。前田被選司教は広島教区の教区長としては歴代6人目、司教としては5人目となります。

叙階式：９月２３日（金・祝日）午後１時
於幟町司教座聖堂

トマス・アクィナス前田万葉被選司教の略歴
1949年3月3日　長崎県南松浦郡新上五島町仲知生まれ（62歳）
1975年3月19日　司祭叙階
長崎教区の幾つかの教会を司牧担当。1988年から1991年まで、司牧のかたわら長崎大司教区報『よきおとずれ』の編集長を務める。2001年から2006年まで、平戸ザビエル記念教会主任、平戸地区長、教区顧問を務めた。2006年4月宗教法人「カトリック中央協議会」事務局長に就任し、現在に至る。

小教区紹介　宇和島教会

笑顔と優しさが絶えない教会

緑の小高い丘の上にひときわ高くそびえる宇和島城の真下に白い宇和島教会がある。隣にもまた白を基調とした愛和聖母幼稚園があった。四国西南部に位置し、入江と半島が複雑に入り組んだ伊達家ゆかりの町でもある。途中、全国的に有名なミカンの産地を思わせる「日本一甘いミカン」の看板を何枚も見かけた。

その日はとても蒸し暑い日曜日だった。教会の一階は駐車場になっていて一服するには格好の場所にもなっている。聖堂は二階にあり、隣には洒落たチャペルを備えている。午前十時、開祭の鐘の音と共にミサが始まる。聖堂内は四方から祭壇を囲む形になっていて、フィリピン人、幼児、を含め三十人ほどの信徒がミサを囲んだ。オルガンのリードに合わせて小気味よくミサ曲を唱和しながら熱心に祈りをささげている信徒の姿があった。

主日のミサ後はいつも二階の信徒会館に、ほとんど全員が集まってお茶を飲みながらいい雰囲気の中、談笑が始まっている。かなり広いスペースと思ったがもっと広さが欲しいとのことであった。責任司祭の田中正史神父（ドミニコ会）は幼稚園々長との掛け持ちで聖書の分かち合いやカテキズムなど、信徒養成にも力を入れ、週日夕方五時半からのミサに信徒を招き、毎日多忙を極める。しかしまたこともご多分に洩れず、老齢化の波が感じられるが、先般、フィリピン人の母親を持つ子供たち七人が初聖体を受け、希望の光となっている。信徒の方の中には教会活動の一つとして宇和島特産の真珠を活かしたロザリオの制作を手掛ける計画を持っているとのこと。宇和島教会生まれのロザリオ誕生もそう遠くはなさそうだ。宇和島教会は今年九十周年を迎える。

ちょっと ひとやすみ（詩）

願
ぼくの詩の言葉が
一つ一つのロザリオの珠のようになって
人々の苦しみ哀しみをなぐさめ
神様への祈りになったらいいなあ・・

宣言
洗礼を受けていないぼくだけど
確かにぼくの中にキリストはおられる
だってキリストは主です
キリストは復活したと
きっぱり言えるもの・・

キリストを話す
一対一で話すことは出来るけど
沢山の人の前で話すのは
ぼくはとっても苦手だ
だからぼくの得意な詩で話そう
あいつは狂人だと
言われるほどじょう舌に
キリストについて話そう

決心
人は少し変わっていることを言うと
変人だとか狂人だとか言う
だがぼくはキリストを告げねばならない

ひと　皆、一生懸命生きている

徳島教会　酒井重子さん(78)

酒井重子さんは、ハンセン病療養所の看護婦として１９歳より３年間の勉強期間を経て６０歳定年まで働かれました。徳島教会で、ロビタイ神父の公教要理クラスに通い、導かれて１９歳で洗礼を受けました。当時、田中英吉神父と津田希穂伝道師が大島青松園の療養者に絵を教えられており、教会より慰問のため訪れたことが、看護婦の道を歩むきっかけとなったのです。お父様は反対され、また「どうせこのような仕事は長続きするはずがない」とも思われていました。しかし、酒井さんは「何があっても乗り越えよう、看護婦になるにはここしかない」と固い決心をされていたのです。幸いにも月に一度、ガエタノ・ペルリーニ神父（ザベリオ会）が療養所にミサをたてに来られたことが大きな恵みと救いだったと言われます。教会はなく、集会所で患者さんは芝居の練習、こっちはミサとなかなか面白い光景だったそうです。その後、神父様はイタリアで資金繰りをされ聖堂を建てられたのです。酒井さんは完成した聖堂を見て涙が止まらなかったと。「聖堂で祈る患者さんの姿は本当に神様と一緒にいる、辛いだろうに何を祈っているのか。自分もカトリックで繋がれている。皆一生懸命に生きている。」と、昨日のことのように語られました。５２歳より神山復生病院に移り、シスター方と働かれ、カトリック信者としての使命も果たされ、在職中としては珍しく勲６等宝冠章を授与されました。そして、現在もハンセン病の方々が故郷訪問の折には付き添いをされています。「信者になっていなければ今の自分はなかった、カトリックで良かった」と静かに微笑まれていました。

徳島教会　桑原稔実

『典礼奉仕』のために ⑫

高松教区典礼委員　稲毛利之師

召命と典礼

召命を考える際、Rene T. Lagaya 神父の「召命の神学」によると、私たちは司祭の召命とか修道者の召命といったもの以前に、元来、神のことばによって一人一人が創造された事実に召命の出発点を見ます。私たちを含めた被造物の出現は神の呼びかけの応答としてのみあり得ます。神の呼びかけ（ことば）が無ければ、わたし達は今ここにいる事はあり得ません。そしてさらに「人間である事」とは、聖書によれば、神の呼びかけに応答する限りにおいて、また、応答出来る程度に応じてそうなのです。神のことばに、呼びかけに、そして人々になんらかの形で応答しなければ、その人がどういうものを携えているにせよ、その人は真の意味において「人間」ではないのです。従って召命は「わたしがわたし自身になっていく事」「わたしがわたし自身になっていく事」の方向性の中に本質を見ます。

簡単に言うと、私たちは時折、人の道などを説いたりしますが、誰一人一人前の人間でさえないのです。人がそれに気付き、人間になるように、自分自身になるようにと神が呼びかけ、そして人がそれに個人的に答えていく事―これが召命です。典礼はこの神の個人個人に宛てた、共同体を通して呼びかけている召命に応えていく場であり、応えていく個人に何かが実際に起こる出来事の場です。

ところで、河合隼雄氏の「影の現象学」という著書によると、すべての人が主人公であり、それぞれの人々の実生活が聖なる物語を形作っていた中世を裏で支えていたのが、愚者の祭りだというのです。「礼拝の最中に…踊りをおどり、聖歌隊は卑猥な歌をうたい、ミサを行っている近くの祭壇のすみで、脂っこい食物を食べ、博打までうちはじめ、教会中を走ったり跳びはねたりする」という愚者の祭りが中世の厳格で聖なる生活を裏で支えていたというのです。

翻って我が国日本の昨今の状況、特に政治状況を見てみると、元政権がある実力者とそのグループを取り込めなかった、活用できずに排除した時から経験したこともない混乱と破綻が始まったと言えなくもありません。そして、日本の現首相は正しいこと、綺麗な事しか言いません。しかし、彼の言葉には何のリアリティーも無い、こちらに伝わってくるものが無いという状況でしょう。これは他人事ではなく、これこそ日本の社会の縮図であり、私たちの教会の姿であると言えなくもありません。教会が典礼を含めて、現首相のように正しいことしか言わない、正しいことしか教えない、そして自分の善意を疑わない、ここが問題です。

自分自身にあるネガティブなもの、不健全なもの、例えば、憎しみや怒り、怠惰や冒涜、不信心や不信と直面する経験が必要です。教会がもっと、こういった自身の不健全なものと、どのように生涯付き合っていくかを指導出来るようにならなければ、司祭の召命など綺麗事にしか過ぎません。典礼が、埃っぽい世俗からしばし離れて味わう一服の清涼剤となってはいないでしょうか。典礼の今後の大きな課題の一つはこれでしょう。この未曾有の混乱と暗闇の只中で、一人一人が「人間になる」為に立ち上がる力をいただけるよう、神の呼びかけにどう応えるか、今、一人一人が典礼の中で問われているのです。

皆さんと共に学びたい

林完（イム・ワン）助祭

高松教区の皆さま、はじめまして。林完（イム・ワン）助祭と申します。洗礼名はパウロです。韓国の大田（デジョン）教区出身です。今年の一月から、司教館で生活しながら日本語を勉強しています。日本に来たばかりの時、同じ韓国の神学生がいたので励まされました。司教様や神父様、神学生たちもとてもよくしてくれます。

日本語の勉強は時々難しいと感じますが面白く勉強しています。読書が趣味で歴史物が好きです。今は日本の歴史で、江戸幕府が敗れて新しい国が出来る時の話を面白く読んでいます。

好きな音楽は、ショパンのノクターン。スポーツは、野球が好きで韓国のイーグルスのファンです。高松はいい意味できれいで静かな印象があります。

高松の信者さんは優しく、国際色豊かな神父様方の文化とか考え方等を勉強出来る機会が多いのもいいです。

召し出しを感じたのは待者をしていた小学校三年生の頃で、神父様がいつも「神父になれ！」と言っておられたからです。高校二年の夏、司祭叙階式に行き、その時の感動が決め手となりました。

色々と足りない部分がある私ですが、ゆっくりと日本の教会で司教様や神父様や信者さんと共に高松の教会のために働いていけたらと思っております。

私の好きな聖句に、「主はわれらの牧者、私は乏しいことがない」があります。神さまが、私と一緒に道を歩きながら、私に力を与えて下さいますようにお祈りください。神様の愛が高松教区と信徒の皆さまに豊かに注がれますようにお祈りしています。

若 い 力

右から３番目が松下恵子さん

サンチャゴ巡礼～イエスさまが越えた道

中島町教会　松下恵子

私は、今回のＷＹＤにサンチャゴ巡礼から参加しました。５日間、１００ｋｍに及ぶ徒歩の旅は「信じられな～い！」の連続でした。準備不足だった私は２日目のRedondela～Pontevedraの道中で、体調を崩し歩けなくなりました。道ばたに座り込んで、みんなに追い越されていく中で、「日本に帰りたい！」と思いました。

そんな中、声をかけてくれた人がいて、その後シスター方にもお世話になり、現地スタッフの方に宿まで送迎していただきました。それからは、沢山の人に気遣っていただき、感謝の連続でした。特に、スペイン人スタッフの女性が、私がトイレへ行くときなど、ずっと支えてくれたり、常に笑顔で接してくださったことが印象的でした。皆さんのおかげで、次の日から回復し、巡礼を続けることができました。途中、荷物を担いでくださった神父様にも、感謝しています。

４日目のPortas～Padronの道中にて、私は一人の韓国人の女の子と仲良くなりました。彼女はあまり体が強くないのに、私を気遣ってくれ、その明るさには勇気づけられました。坂道などにさしかかって苦しいときは、「イエス様もこんな道越えたのかなぁ」と話しながら励まし合いました。

今回の旅を通して、仲間の大切さ、自分の過去を肯定することで前に進めることなどを学びました。ただ、何を選び、行動していくかは自己責任であるため、これからが重要なのだろうな、と思っています。

最後になりましたが、高松教区、大阪教区の司教様、神父様、ブラザー、青年たちに深く御礼申し上げます。

巡礼を通して～多くの気づきと恵み

松山教会　寺尾由香里

まず今回の巡礼に参加できたことを感謝します。

Ｂコースでも全日程の参加が難しかった私のためにブラザー八木が事務局に掛け合ってくださった事で、参加出来ました。中途参加になりましたが参加することすら難しいと思っていた私にとっては出発前から大きな恵みでした。

途中からの参加だったのに班の人たちが温かく受け入れてくれたことがても嬉しかったです。短い期間だったけど、分かち合いや一緒に食事をする事で交流を深める事が出来ました。

言葉の違いに不安があり自分から声をかけるということに勇気が必要でしたが、班の人たちに支えられて少しはコミュニケーションをとることが出来ました。巡礼なのにそんな格好で？と思われるかもしれませんが、持参していたゆかたを着ている事で、外国の方から声を掛けてもらい会話のきっかけが出来ました。ゆかたに助けられました。世界中から人々が集まるので、宗教的な交わりだけでなく文化的な交流もいいものだなと思いました（その為には語学力が必要だとつくづく思いましたが…）。世界の人々を見て、文化や考え方がいろいろあるんだな、ということを感じました。でも、教皇ミサの時にはキリストに根ざしてというテーマのもと集まった青年達が同じ気持ちでミサに与る事が出来たのではないかと思います。１００万人以上の人が一つの場所に集まれるということに感動しました。最後になりましたが、ＷＹＤ参加にあたり教区から多大な支援を頂きました。本当にありがとうございました。皆様に支えられての多くの恵みに感謝しています。この巡礼を通しての気づきや恵みを少しでも多くの人に伝えることができますように…。

会場にて　浴衣姿が寺尾さん

仙台司教座聖堂

高松教区（東日本大震災）サポートセンター［ＴＳＣ］立ちあがる

高松教区サポートセンター［ＴＳＣ］は７月９日の設立準備会を経て８月１７日の第１回会議をもって活動を始めた。

センター長：谷口広海助祭、（大阪教会管区支援室長:諏訪榮治郎司教）
センター員：レナト・フィリッピニ神父（桜町）、田中正史神父（宇和島）
川上栄治神父（道後）
ｾﾝﾀｰ地区員：橋本正士・片山耕太郎（徳島）、兵頭俊介（愛媛）
須山二朗・六車寛行（香川）、林弥生（高知）　2011/9/1 現在

オールジャパン会議

３月１１日に東北地方で起こった大地震は千年に１度のものと言われ、それが惹き起こした大津波によって数多くの人命と沿岸部の数々の都市のみならず、原子力発電所も破壊され、想像を絶する三重苦となる甚大な被害に見舞われた。復興復旧には１０年単位の時間を要すると言われる。その中で東北地方一帯を管轄するカトリック仙台教区も大きな被害を受けた。

この状況を受けて仙台教区は単なる原状回復を超えた「新しい創造（被災者の日常生活を取り戻すために）」という目標を打ち出し、時をおかず、緊急かつ現実的な活動に乗り出すために仙台サポートセンターを立ち上げた。日本カトリック司教協議会も仙台教区と被災地域の支援に取り組むために「カトリック司教協議会東日本大震災復興支援室」を設置し、仙台教区が打ち出した「新しい創造」への力になるべく仙台教区の要請に応える**司牧支援と地域支援**という二本の支援の柱を基本に据えた。

惨状を留める志津川

その上でカトリック司教協議会は日本教会を長崎教会管区、大阪教会管区、東京教会管区の三つのグループに分け、それぞれが独自の立場で支援していくことを決定し、仙台教区が東北沿岸部の特に大きく被災した地域（自治体）と教会を支援するために、内陸部にある教会の司祭を沿岸部へ派遣する「新しい創造」に乗り出したことを受けて、そのため内陸部の司祭不在になった教会に３教会管区から各２名、計６名の司祭を派遣する司牧支援（教会内部支援）を決定し実行している。

地域支援については基本的に長崎教会管区は岩手県、大阪教会管区は宮城県、東京教会管区は福島県を担当し、地元教会をベースに地域を支援をするという方針に従って動き始めている。これらの活動は管区独自の責任においての決定と活動となるが、勿論、仙台サポートセンターとの緊密な情報交換と連携の中での動きとなる。

また現在、東日本大震災復興支援のため、カトリック全教区と男女修道会そしてカリタスジャパンを網羅して情報の窓口となるオールジャパンネットが設置され、全教会での情報の共有と連携を図っている。そのオールジャパンネットが７月１１日から２日間開催した現地仙台教区での会議と被災地視察に谷口広海助祭が参加した。誕生間もない当［ＴＳＣ］高松教区サポートセンターは上記「仙台教区サポートセンター」、「カトリック司教協議会東日本大震災復興支援室」、「大阪教会管区（支援基地）」との連携のもと、オールジャパンネットを窓口として活動することになる。

湾口から６kmにわたって破壊された大船渡の町を
大船渡教会へ上る坂から見た光景

［ＴＳＣ］高松教区サポートセンターの性格と働き

性格

- 高松教区の認可した委員会である。
- 仙台教区サポートセンター（ＳＤＳＣ）の後方支援を行う。
- 大阪教会管区との連携を大切にする（協力）
- 高松教区としての被災地へのサポートのあり方などを協議し、実行する。
- ＴＳＣには四国各地区から２名が派遣され、定期的に協議し、教区と地区への情報を伝達する。
  地区はＴＳＣの意向に沿って協力し救援活動にあたるが、地区独自の活動も認められる。

働き

- サポートセンター事務局がまとめに当たる。
- 責任ある息の長いサポートのために常駐スタッフを確保する。
- 現場への派遣、サポート、情報収集、情報発信
- ボランティアの受け入れ、ミーティング、立案実行評価を祈りの中で行う。
  以上を確認し今後の活動の指針とした（教区ホームページ掲載）

現在大阪教会管区は支援基地として大船渡にベースを設けるための現地交渉を始めている。ここが立ち上がると［ＴＳＣ］の現地基地ともなる。

塩釜教会ベースの青年ボランティアたち

「人間にとって一番大切なものは
心を育てることである」
ー創立者　聖マリ・ウージェニーのことばー
学校法人　高松聖母被昇天学院
マリア幼稚園
香川県高松市多肥下町１４番地３
TEL　087-867-7303

住環境福祉コーディネーターが家造り
福祉住環境リフォーム
高齢者・障害者に配慮したバリアフリーの住宅
福祉住環境リフォーム・新築・増改築工事・設計施工
有限会社リフォームオオタ
代表取締役　太田　修
〒763-0092　丸亀市川西町南449番地3　TEL (0877) 28-0881・FAX (0877) 28-0190
E-mail o-chandazo@theia.ccn.ne.jp　URL http://www.reform-oota.co.jp

学校法人 聖母学園
高松聖母幼稚園
明るく逞しく、心豊かで調和のとれた円満な人間性の基礎を育む
〒760－0017
香川県高松市番町２丁目４番３１号
TEL：０８７－８５１－２３７２
FAX：０８７－８２３－０４１７
URL：http://www.seibogakuen.ed.jp/
E-mail：info@seibogakuen.ed.jp

医療のともしび（28）

老いた精神障害者

私は８２歳になった。約２５年間嘱託医として、毎週１回行っていた養護老人ホームでの医療の仕事を、この３月で辞任をした。

１０年前、大学の同窓会の席で精神科専門の友人に、精神科退院の患者が養護老人ホームに多く入所してきたが、問題を起こさないのであろうかと、質問をした。精神病は（統合失調症もふくめ）、今では、５０％は治る時代だという。その友人がトイレに行っている間に、内科学教授をしていた同級生が私に、精神科の医師が精神病の半分は治るといっても直ちには信用できないよなあ、とつぶやいた。

彼らは今、養護老人ホームで、他の老人とおなじように普通に生活をしている。内科・外科・整形・精神科などにそれぞれが受診をしている。生活に大きな問題は少ないが、その対応に精神保健福祉士、臨床心理技術者が居れば良いのだがと、つくづく思うことが多い。ハンセン氏病が解放され、精神病者が社会に復帰するのも、自然な時代の流れであり、当然の成り行きと思われる。社会の受け入れ態勢は、いまだ不十分である。

「多くの精神障害は遺伝性疾患でない」、そして「親の育て方で統合失調症などの精神障害が発症するわけではないが、発病後の家族の接し方が予後を左右する」という事実が、データで実証されている。精神障害の発症には複数の遺伝子と複数の環境因子が関係し合っており、糖尿病や高血圧と同じく多因子疾患である、という結論に達している。

―精神障害の臨床：日本医師会雑誌特別号131-12―

日本カトリック医師会　橋本　雍

教区スケジュール

10月
- 2日（日）年間第２７主日
- 5日（水）一日司祭集会in塩江10：00　司祭評議会15:30
- 7日（金）特別臨時司教総会
- 9日（日）年間第２８主日
- 10日（月）体育の日
- 16日（日）年間第２９主日
- 18日（火）聖ルカ福音記者　祝
- 23日（日）年間第３０主日　世界宣教の日（献金）
- 28日（金）聖シモン　聖ユダ使徒　祝
- 29日（土）シアニ神父（OMI）追悼ミサin鳴門
- 30日（日）年間第３１主日

11月
- 1日（火）諸聖人
- 2日（水）死者の日　司祭評議会12：00
- 3日（木）文化の日
- 6日（日）年間第３２主日
- 9日（水）ラテラノ教会の献堂　祝
- 12日（土）青年・高校生のつどい　愛媛地区（～13日）
- 13日（日）年間第３３主日
- 18日（金）宣教司牧評議会13:00
- 20日（日）王であるキリスト　聖書週間（～27日）
- 23日（水）教区宣教大会〔高松司教座聖堂〕勤労感謝の日
- 27日（日）待降節第１主日（B年）
- 30日（水）聖アンデレ使徒　祝

神様の願う保育者の姿を求めて

7月29～30日

第３９回高松司教区幼稚園連合会教職員研修会

七月二十九日―三十日、徳島市のホテルにおいて高松教区幼稚園連合会教職員研修会が開催された。四国全県からカトリック幼稚園の園長をはじめ主任、教諭約百名が参加し、一日目はカトリック学校連合会理事長河合恒男師（サレジオ会司祭）によって「神様の願う保育者の姿」と題し、キリスト者的思考をもってかけがえのない子供たちとその保護者に寄り添う教育者の姿を考えた後、八グループに分かれ現状を分かち、今後の姿を探りグループごとの発表を行った。二日目は近い将来、こども園へと移行が取りざたされている事案を政治状況から分析し、備えについての解説を日本私学教育研究所専任研究員、大森隆實氏から聴く講演研修会となった。参加者はこれからの幼稚園の在りようの変化に不安を抱きつつも希望を胸に研修会を閉じた。

戦争はダメだ

江ノ口教会　毛利美来

八月五日、広島の幟町教会の地下聖堂で話をききました。一九四五年八月六日に投下された原子爆弾によって広島は焼け、ほとんどの建物がなくなっていたり、大勢の人達が亡くなった話を聞いてかわいそうでした。だから亡くなった人たちの苦しみと悲しみを繰り返さないようにしたいです。ミサでも話を聞いて、戦争をしたらダメだと思いました。

原爆ドームを見に行きました。小学校の時にも修学旅行で見ましたが、その時は遠くからみるだけだったので、今回近くで見ると、原子爆弾で変形した石やガラスのかけらがありました。そして橋を見ると、原子爆弾をどこに落としたかがわかりました。ちょっと、形が違っていたからです。

二日目、高松に戻って桜町教会のコンサートで千の風になってを歌いました。楽しかったです。とてもいろんなことを聞いて勉強できた二日間でした。

届け東日本の空へ

桜町で平和コンサート

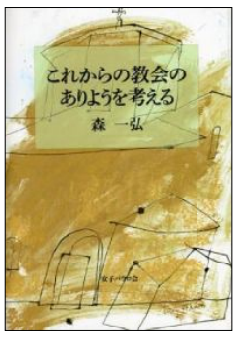
今年も平和旬間の一環として教区養成組織の一つである「賛美の歌」が「平和のためのコンサート～朗読と共に」と謳い、第四回目のコンサートを八月六日、桜町司教座聖堂を会場として開催した。特に今年のプログラムは東日本大震災被災者への想いを祈りに込め、第一部は〝被災者への祈り〟、第二部は〝平和への祈り〟とし、三十余名の出演者と聴衆が一体となり、朗読とのコラボレーションのなかで心に安らぎと平安を感じたコンサートとなった。会場には広島の「平和行進」からそのまま参加した子供たちの顔もあり、その場を盛りたてた。

参加者の中には原爆と原発の被災者を想い涙される方も見受けられ、その祈りの中、コンサートは閉じられた。また、大勢の方々と歌を通してお祈り出来た幸いを深くかみしめながら、東日本の空に私たちの祈りと想いが届きますように。

桜町教会　楠　信子

新刊書籍紹介

■これからの教会のありようを考える



著者はまず、12使徒の使命が福音を宣教することであったことから現代世界に福音をのべ伝えるとはどういうことかを述べます。

この視点から、19世紀の教会の歴史をふりかえり、第二バチカン公会議から、現代の教会までの歩みを確認しながら、今の日本で、政治とかかわるヒント、社会における宗教の役割など、常日頃、私たちキリスト者がとまどい、思い悩む問題に豊かな示唆を与えます。ぜひ読んでいただきたい１冊です。

著者：森一弘
定価：1,260円（1,200円＋税）
発行：女子パウロ会
Ｂ６判並製 175頁

■平和の使徒 ヨハネ・パウロ二世 希望と愛をたずさえて

ヨハネ・パウロ二世列福記念第264代ローマ教皇として積極的に世界各国を歴訪し、戦争や暴力に勇気ある反対の声を上げ、すべての人間の尊厳と人権の尊重を訴え続けたヨハネ・パウロ二世。その生い立ち、世界中で伝え続けた愛と勇気の言葉をとおして、同教皇の人間的な魅力と信仰の強さを伝える。

著者：中井俊已
定価：777円（本体740円＋税）
発行：ドン・ボスコ社
新書判並製 189頁（カラー口絵4頁）

今度は家族で行きたいキャンプ

徳島地区夏季キャンプ

土曜日の勉強会の時に、徳島地区のファミリーキャンプのことを知りました。僕は行きたいと言って、七月二十三日に徳島に集まって、日和佐にキャンプに行きました。

はじめにグループ分けがあり、僕は八グループでした。ブラザー阿部がリーダーでした。

プールで泳いだり、花火をしたりしたあと、お風呂に入って寝ました。とても楽しかったです。

次の日に朝食を食べて八時半から第一研究室で、ずーっと劇の練習をして、十一時に劇の本番をしました。

十二時にお昼ご飯を食べて、外に出て海を見に行きました。

少し後、ミサがあり、聖歌を歌ってお祈りをしました。そして二時には帰る準備をして帰りました。とても楽しかったので、今度は家族で行きたいです。

徳島教会　水野修司

編集後記

今年も暑い夏になりました。

大人はエアコンに涼しさを求めて夏に対抗しようとします。子供たちといえば熱い陽の中に出て、汗をものともせず広場で駆けっこ、草むらで虫取り、無邪気な元気が一番です。

六月からこの九月までに三人の司教が生まれました。高松教区の両隣りということで、これからの司牧に新しい風が吹くことでしょう。

これまで本教区報への意見や提案が少なかったように思います。皆さん、どしどし記事、提案、ご意見をお寄せ下さい。

広報委員会一同

聖ドミニコ宣教修道女会

私たちは、自分を創造しようとするこどもをまなび、護りましょう
暁の星学園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園

食べる青唐辛子　絶賛好評発売中！
自然の味わいをいつまでも
株式会社サンコウフーズ
〒761-4421 香川県小豆郡小豆島町苗羽甲 2204
TEL 0879-82-0430　FAX 0879-82-1102
URL http://sankou-foods.com
E-mail shodoshima@sankou-foods.com